

ILTの悪夢再来か？（2）早期に対策を

4.ILTの予防法

前回述べましたように、ILTはそれ程急速には伝播、拡散しません。その様な特徴から防疫に対する意識が薄らぎやすいのかも知れません。しかし、一旦発生しますとその恐ろしさが解ります。予防法の基本は衛生管理とワクチン接種にあります。

1)衛生管理の徹底

本病の予防対策としては最も基本的な衛生管理の徹底が非常に重要です。伝播が主に直接・間接接触によって起こるといふ本病の特性を考慮して、衛生管理上で注意すべき事項としては、次のことが挙げられます。

(1) 雛は本病に汚染していない農場から導入すること。

本病の特徴として前述したとおり、汚染農場では病気が終息した後も”保毒鶏”として無症状にも拘わらずILTウイルス野外株を持っている鶏がおります。そのため鶏を導入する時、病原体を持ち込むこととなります。過去の流行時にはこれにより病気が拡がったということもありました。

(2) 外部から養鶏器材等を搬入する場合には車を含めて完全に消毒すること。

ウイルスに汚染された器材等を介して直接あるいは間接接触することにより容易に病気が拡散致します。特に養鶏場密度の高い地域では様々な場面で養鶏関係車輛、飼料、器材等の往来が活発になります。これらを確実に消毒すること、あるいは物流を遮断することは防疫対策上、最も重要な点です。

(3) 部外者の場内立ち入りを制限すること。

農場では飼養管理者は必ず鶏舎内に立ち入ります。そこで作業すれば、手指、衣服、履き物等に必ずウイルスが附着します。この量は様々でしょうが、例えば感染鶏が排出した気管内容物では1滴中に1,000個以上のウイルスを含んでいます。これらを念頭に農場管理者は絶対にウイルスを鶏舎外に持ち出さないように注意することは当然の義務です。しかし、消毒にも限度がありますので、汚染農場関係者は他農場への立入を避けるべきです。また、清浄農場側からは汚染農場関係者の立入は丁重かつ断固に断るべきです。

2)ワクチン接種 ――過去の誤解は解かれたか？

汚染が進行した地域では衛生管理のみでは防疫に限界があるため、ワクチン接種が必須要件となります。本病の弱毒生ワクチン株では通常、病原性と免疫原性の強さの間には相関性があり、免疫原性の強い株は病原性が強く、同居感染を起こすものがあります。したがって、使用に際してはワクチン株の特性を良く理解した上でワクチンを選択することが重要です。「ワクチン接種が汚染農場化への入り口」という過去の図式は全てに当てはまるものではありません。以下に使用上の留意点を10箇条に整理いたしました。

(1) 生ワクチンウイルスは高温に弱く、失活しやすい。

時間が経てばそれだけ活性が低下しますので、ワクチン溶解後は速やかに、できれば1時間以内に使用することをお勧めします。また、接種時に高温にならないように注意する必要があります。

(2) ワクチンは点眼または点鼻接種で使用して下さい。

免疫率を上げるためには規定量を確実に接種して下さい。

(3) ニューカッスル病生ワクチンによってILT生ワクチンによる免疫が部分的に阻害されます。

避けるために本ワクチン接種の前後7日間はND生ワクチンを接種しないようにして下さい。

(4) 免疫はワクチン接種後比較的速く出現します。

接種後5日頃から出現し始め、2週間後にはほぼ免疫ができます。ILTの鶏群内での伝播速度が遅いことと相まって、突然、本病の浸襲を受けた場合には、未発症の鶏群からいわゆる緊急接種を行うことでそれ以降の病気の拡散を防止できることがあります。

(5) 免疫の持続期間

幼雛期に接種された雛では短く3ヶ月以上、大雛期以降に接種された鶏では長く、ほぼ6ヶ月以上持続します。

ILTの悪夢再来か？ (2) 早期に対策を

(6) ワクチン株自体による発病は避けられます。

製品によってはワクチンウイルスが同居感染し、また、発病させるものがあります。その様な製品を使用した場合、非免疫鶏群にウイルスが伝播しないように、接種鶏群を隔離し飼養することが必要です。

(7) 「日生研ILT生ワクチン」はワクチンウイルスが養鶏場内に残りません。

ワクチンウイルスによる水平感染は起こらないことから、接種鶏群を隔離する必要はありません。そのため、野外感染の危険性が低下し、ワクチン接種の必要性がなくなれば何時でも接種を中止できます。

(8) 免疫率と日齢

図1または2に示したとおり、若齢雛に接種した場合、免疫率が低く、また免疫の持続が短くなります。そのため、幼雛期は衛生管理で防御し、中雛期以降ワクチン接種により免疫を付ける方が免疫が強くまた持続も長くなります。

(9) 必要に応じて再接種を実施して下さい。

図3に示したとおり、ILT生ワクチンでは追加接種によりブースター効果が認められます。流行状況を見ながら必要に応じて追加接種をお勧め致します。

(10) 本病の予防には安全性が高く、扱いやすいワクチンがお勧めです。

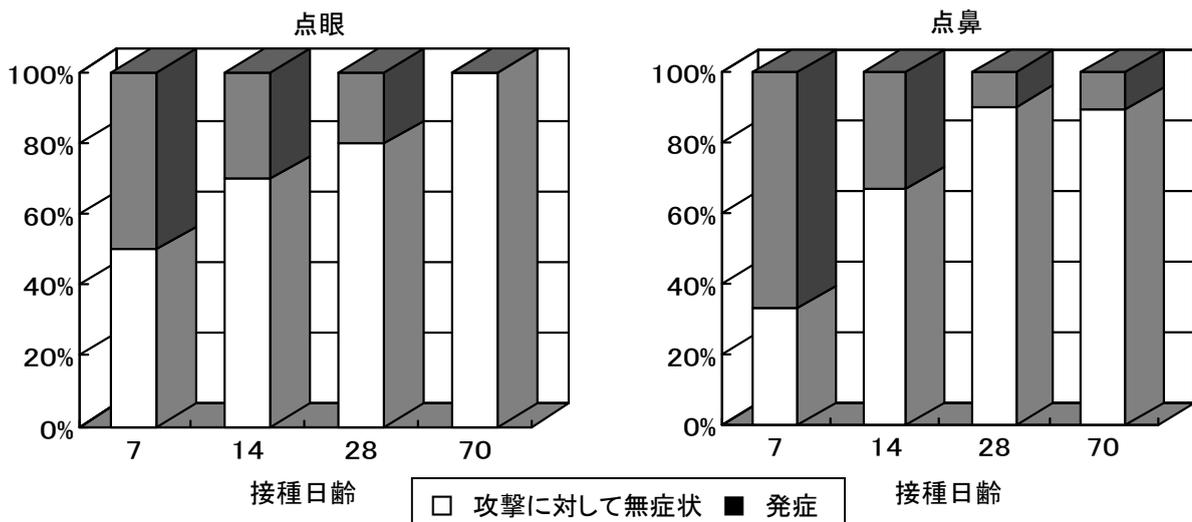


図1 「日生研ILTワクチン」の免疫原性

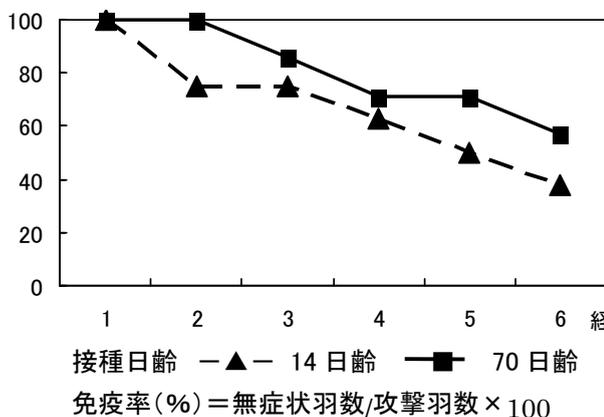


図2 「日生研ILT生ワクチン」
接種鶏における免疫の持続

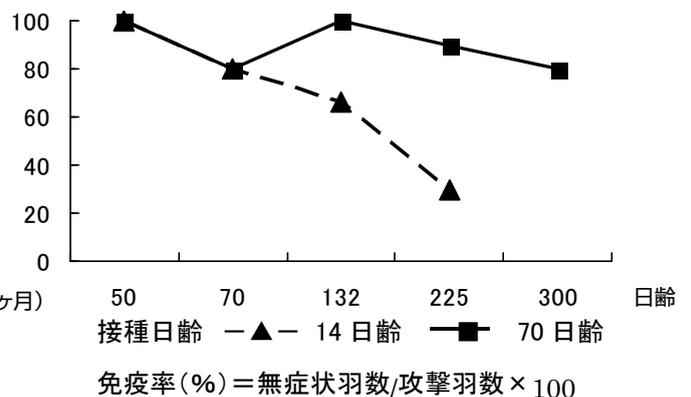


図3 「日生研ILT生ワクチン」
2回接種鶏における免疫の持続